

# 問答連 第十九回 瓦版

哲学カフェ 第四期 第二回

六月二十四日(日) 二時から四時

【テーマ】

## 人間は動物の中で特別なの？

前回に続いて、二人の異なる立場によるわかりやすいテキストを提供して話し合いを進めようと思います。今回は、人間と他の動物とのいろんな面からの比較です。人間は生物界の中で進化の頂点にあり、「万物の霊長」とか「ホモサピエンス(智慧ある人)」のよう



点(ポイント)が特別であり、その特別性に優劣があるのかどうか、さらにはその特別性の特徴とされる言葉や知性は、生命存在にとってどのような意味を持っているのでしょうか？

また、人間と生物の将来にとって、問題や不安はないのでしょうか？等々、他の動物の生き方と比較しながら、様々な側面から「人間とは何か」「自分とは何か」を話し合っていきたいと思えます。

テキストは、東京大学名誉教授で哲学者の 一ノ瀬正樹さんによる「人間は特別だけれど、どんな動物も同じく特別」と人間存在研究所の研究員である山田武さんによる「人間は、言葉を持つ」ことでどう変わったの？」という内容です。二人の主張はよく似ていますが微妙に異なります。前者は「動物の方が道徳的にすぐれているとさえ思いたくなる」という「かもしれない」論と後者は「言葉のパワーを持った人間のすることは、愚かなことが多いよね。」という「愚かだよ」論です。

人間は、他の動物よりも優れているかもしれないのか、本当は愚かなのか？ 明確な回答はないと思いますが、何かこのテーマは深く考えてみる価値があるのではないのでしょうか。とくに人間の特別性が、言語にあるとすれば、どのように特別で、その賢さは将来の人間や生命全体にとってどのように役立つことになるのでしょうか。いろんな議論を楽しみにしています。

(第二回 世話人 大江矩夫)

\* \* \*

当日配布する【テキストの一部】から

A) みんなは犬の言葉を知っているかな。うん、お腹がすいたときの声は分かる。なるほど。でも、人間同士のように分けられない。それじゃ、犬には言葉がないのかな。犬同士にだけ分かる言葉もないって、言えるかな。ここでややこしいのは、「言葉がない」とか「言える」というのも、ぼくたち人間の言葉だということだ。そこをできるだけ差し引いて、自分が犬の側に立っていると一所懸命想像すれば、もしかしたら、犬には、人間には理解できない、犬同士の言

葉があつて分かり合っているかもしれないと思えないかな。

ここで大事なものは、この「かもしれない」を全面的に否定できないということなのだ。人間は人間の言葉で自分たちを「万物の霊長」といって特別視しているけれど、もしかしたら犬は犬の言葉で人間を評価して「いじきたなくて、生きることに固執する気の毒な者ども」(？)なんて思っているかもしれない。犬以外の動物にも同じことが言える。だとしたら人間だけが特別優れているとは断定できない。

(一ノ瀬正樹)

B) ふつう言葉は情報(知識)を伝える手段と考えられているけれど、伝達の前に情報・知識の内容を明確にして伝える必要があるよね。「えーと、えーと何をどのようにつなげれば良かったんだろう」と話す前に疑問を解消してなければならぬから。また、話しながらでも「ああでもない、こうでもない」と言葉で考えながら話すよね。でも動物はゆっくり考えようとする事ができないんだよ。

でもそれでほかの動物より偉いということはないよな。そんな言葉のパワーを持った人間のこととは、愚かなことが多いよね。人間は、神を創って自分の力や正しさを説明したり、自分の主張に従えようとしていたり、わざと誤魔化し平気でウソをついたりするんだ。動物にも敵をあざむく知恵があるけれど、人間の場合よりも単純で自然の秩序に従っているだけなんだ。人間の場合は、自然自体を破壊していることに気づかないどころか、自分だけは神に守られているから、死後は幸福が保障されていると考えている宗教もあるんだ。

(山田 武)

「過去はどこへいつちゃったのだろう?」 報告

今回の哲学カフェでは、趣向を変えて、「子どもの難問」という本の一部を資料にして、話あいました。

どうなるかな?と少し心配でしたが、とても楽しく充実した話し合いになりました。

最初にテキストに使った、野家啓一さんと永井均さんの文章について、いろいろな意見ができました。

野家さんの文章の結論になっている文「確実な根拠や証言の土台に支えられている限り、過去は信頼できる「物語り」の中に立派に実在するのです。」については、「確実な根拠や証言」って何?そんなものってあるの?という疑問が出ました。ここでいう確実な根拠という表現には、やはり、どこかに過去として「客観的な実在」が存在するという事が前提にされているのだろうと思えましたまた、思いだされた昨日のラ

時間は 2時~4時

会場は 『ムーレック』

詳細はホームページをご覧ください

今後のスケジュール

六月(四日)(日)

人間は動物の中で特別ななの?

\*七月(八日)(土)

「広瀬・公爾・盛の論」

「場所と空間から都市の生活史を考へる」

八月(五日)(土)

どうすれば人は

分かりあえるのだろうか?

\*九月(二日)(土)

「心と身体」―気功の本質―

\*印はゲストスピーカー

メンの「辛味噌の味は辛くも甘くもありません。」という部分について、自分は、リアルに思い出すことができる、という意見がでて、そこから、さまざまな記憶の話に話題がひろがり、フラッシュバックのように、リアルに過去がよみがえることがあるということや、逆に昔の強烈な思い出も、何度も物語られる内に、書き換えられていくのではという意見、また、記憶が言語的な記憶として語られ過ぎていて、いろいろな動物が学習することから、動物にも、言語的な記憶以外の記憶があると考えるべきだという意見。三歳までの記憶は、言語的記憶におきかえられるが、実は、映像的記憶でフラッシュバック的によみがえるという中井久雄の説の紹介。野家さんは、「過去の実在」を言語的に共有されることに求めているけれど、私的な記憶、私的な過去へのめくばりが足りないのではないかという意見。また、永井均さんの「過去はどこにも行かず、今ここにある。」という部分の理解のしかたも問題になりました。この部分は、野家さんの議論で少し弱いと感じられた、私的な時間、私によって生きられた「厚みのある今」という時間(主観的時間)に、実は、「過去」や「客観的な時間」という考え方の根拠があるという指摘だと思えました。また、このような時間の多様なとらえかたについて、その人の個性によって、とらえかたが決まってしまうって、議論しても並行線になるのではないか?いや、そういうさまざまなとらえかたの違いを、ゆつたりと味わい合うような関係が大事ではないか?という意見。その後、休憩をはさんで、発題者がミヒヤエルエンデの「モモ」という時間泥棒のお話を紹介し、資本主義社会で自然科学的で量的な

時間の考え方が強くなりすぎると、実際に生きられている私的で質的で自由な時間というものが効率優先の原理で押しつぶされてしまう危険があること、その意味でベルグソンなどが主張する「主観的な時間」こそがほんとの時間だという考え方も大事にしたいと述べ、それについて、それぞれの実感から、今の社会のゆがみ、若い世代の生きづらさなどについて話しあわれました。全体を通して、それぞれの経験や意見に耳を傾け合うゆつたりした時間を味わうことができました。個人的には、ある方が語られた、朝鮮戦争の時代に「旧日本軍の兵舎あと」という不思議な空間で体験されたさまざまな強烈な体験と記憶が現在の自分に大きな影響を残しているというお話が、強い印象を残しました。こういうお話をうかがえることが、哲学カフェの醍醐味だなと、つくづく思いました。率直にいろいろお話を聞かせていただいたみなさん、ありがとうございました。

(参加者からの感想)「時間って何?」というのは、本当に難問です。私は難問に突き当たると、いつもその言葉の定義を考えます。言葉は突き詰めると主観の問題になりますから。今日の話は、参加者から「時間」についてのいろんな話が聞けてとても有意義でした。過去の記憶が思い出されて、時間についての実感が意識されてくるのだと思いました。しかし、時間を意識して、時間に追われる生活は何か変ですね。

